

平成31年度入学（一般入試 前期日程）試験問題の出典

看護学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	－	湯浅 誠	「なんとかする」子どもの貧困	KADOKAWA, 2017年より pp.68-71	KADOKAWA

平成 31 年度 一般入試・前期

看護学部

小論文 (60分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(100点)

こども食堂が急増している。朝日新聞(16年7月1日)によれば、全国で300か所以上が確認されている。しかも、うち285か所はこの2年間の開設だということから、ちょっとしたブームと言ってよいだろう。

こども食堂のメリットは、なんといってもその「とっつきやすさ」にある。広がり続ける子どもの貧困に心を痛めている人は多い。「親の責任だ」と非難していれば子どもたちの状況が改善する、というわけでもない。少子化が進む中で貧困率増加は、日本の将来像にも影を落とす。教育は大事だが、勉強を教えられる自信はない。何かできないかと思うが、何をすればいいのかわからない。——そう思い悩む人たちに、こども食堂は格好のツールを提供した。「これならできるかも！」

同時に忘れてならないのが「こども食堂」というネーミング。「こども」「食」という“必殺アイテム”を並べたこの簡潔なネーミングが、誰のために何をするかをこれ以上ない形で明確に表す。こども食堂の広がり、このネーミングを抜きには語れない。

その名づけ親が、近藤博子さんだ。「気まぐれ八百屋だんだん店主」の肩書をもつ、東京都大田区にある小さな八百屋さんだ。彼女が「こども食堂」の呼び名を使い始めたのが2012年。それ以前にも同様の取り組みはあったが、こども食堂という言葉は、ここから生まれた。

その近藤さんが今、「こども食堂」ブームを歓迎しつつ、懸念も示す。それは「こども食堂は、こどもの食堂ではない」ということ。どういうことか。東急池上線・蓮沼駅にほど近い「だんだん」を訪ね、話を聞いた。

近藤さんがもっとも懸念するのは「こども食堂というと、貧困家庭の子どもたちを集めて食事をさせるところと思われてしまう」こと。それが、広がりを生む半面で、反発も生んでしまった。いわく「貧困家庭の子ばかり集めるなんて、子どもがかわいそうじゃないか」「子どもの貧困は親の責任。他人が介入すべきではない」

違う、そうじゃない。もともとその定義が誤解を含んでいると近藤さんは言う。近藤さんの定義はこうだ。「こども食堂とは、子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」。それだけ。「子ども」に貧困家庭という限定はついていない。「子どもだけ」とも言っていない。

大事なことは、子どもが一人ぼっちで食事しなければならない孤食を防ぎ、さまざまな人たちの多様な価値観に触れながら「だんらん」を提供することだ。だから、一人暮らし高齢者の食事会に子どもが来られるようになれば、それも「こども食堂」だ。子どものための、子ども専用食堂ではない。

「むしろ、より積極的に、多世代交流型になることが望ましい」と近藤さんは言う。孤食をわびしく感じるのは、子どもだけではない。若者もお年寄りも、仕事で疲れて食事をつくる元気の出ない母親や父親も「今日はちょっと食べに行こうかな」と寄ればいい。そして、子どもは食事後に遊んでもらったり、ちょっと勉強を見てもらったり、親は人生の先輩たちから子育てのアドバイスを受れたり、地域の子育て情報を交換したり、お年寄りは、子どもと遊んであげることを通じて子どもに遊んでもらえばいい。そこに障害のある子どもや大人がいてもいいし、外国籍の子どもや大人がいてもいい

い。より多くの人たちが「自分の居場所」と感じられるようになることが理想だ、と。

おそらくそれは、壁やドアで仕切られた特定の空間である必然性もないだろう。バイク屋の前で、店主がバイクの手入れをしていると、ワルガキどもが寄ってくる。元気か？ どうしてる？ 学校行ってるのか？ と立ち話する中で、いつの間にか進学相談やアルバイト相談や恋愛相談になっている。そんな“場”。家の前の掃きそうじをしていると、近所の人を通りかかって話し込むことになり、そこに下校途中の子どもたちが寄ってきて、そのお母さんたちも合流して、子どもたちが遊ぶ中で大人たちが立ち話しているような、そんな“場”。人々が交差するときに、ただすれ違うだけでなく、ちょっと^{とど}留まることによって生まれる“場”が、近藤さんのイメージだ。

(湯浅 誠『「なんとかする」子どもの貧困』, pp.68-71, KADOKAWA, 2017年より、一部改変)

問 1 近藤さんが考えるこども食堂の意義を、50字以内で書きなさい。

問 2 問 1 の意義をふまえて、現代社会の特徴を示したうえで、今の社会にどのような留まる場をつくることが実現可能だとあなたは考えますか。理由とともに 600 字以内で述べなさい。